

現代社会と若者たちを活性化する15のキーワード

# 「社会知性」

# 1

大学は教育における最高学府とされてきたが、1980年代から大衆化が急速に進行してきた。さらに少子化によって、2007年度には志願者と入学者が同数の「全入」になるといわれる。そんな時代にあるべき大学教育とは何か。専修大学から現代社会への提案を、これから15回のシリーズで紹介していく。

## 社会問題を主体的に 発見・解決していく知性

相次ぐドラスタイックな規制緩和によって、日本社会は市場原理主義へと変貌しつつある。行政の事前関与を減少させることで、経済を活性化させることが目的だが、その反面で、違法でなければ何をやっても自由という風潮が生まれてしまった。倫理や道徳が意味を失えば、残る指標は金銭しかない。かくて、私たちは勝ち組、負け組として評価される「格差社会」という荒海に漂流を始めたように見える。

そんな時代に、大学教育とはいったいどんな意味を持つのだろうか。07年度には数の上では志願者全員が入学できる「全入時代」になるともいわれており、大学はすでに特別な教育機関ではなくなった。

こうした時代性を踏まえて、専修大教育と言い換えることもできるだろう。そして、希望と期待を込めて換言すれば、あるべき社会を求めて、現実と闘うことができる知性なのである。

「専修大学は、明治維新の後に米国に留学した4人の元・武士によって1880年に創立されました。日本が近代市民社会へと移行した時期であり、そのための規範や価値観を普及させることが大きな目的です。このため教科書をすべて日本語にしたことに注目しなければなりません。この当時、新たな学問分野はすべて外国語でしたが、それでは特定の人たちしか理解できない。市民レベルで近代社会を支える人材を育成するためには、外国語では駄目なのです。専修大学が夜学としてスタートしたのも、そのためです」

現代も、明治維新ほどではないが、激変期にある。前述したように、規制緩和と市場原理によって、伝統的な規範や価値観はほとんど崩壊寸前と聞いていいからだ。

「創立者は国費などで留学して最新の学問を修め、近代社会を経験しました。それを社会貢献という形で日本に還元するために専修大学を設立しました。では、彼らが今生きていたら、どう思うだろうかと考えたわけです。ですから『社会知性』は建学の精神を現代的に言い換えたものであり、実は専修大学の基本にある精神なのです。ただ、これまでは外部ではあまり意識されてこなかった。そこで言葉を与えることによって、大学はもろんですが、社

学では教育改革を進めているが、その柱となるのが「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」である。「これまでにない、まったく新しい概念です。端的に言えば、社会の諸問題を主体的に見つけて、これを主体的に解決していく能力をいいます。この社会知性には2つの側面があります。まず、大

学として、日本の屋台骨を支えるような人材を育成すること。次に、時代が必要とする社会知性を広く発信していくことです(日高義博学長、以下同) この社会知性は、問題解決能力だけでなく、情報処理、自己表現、コミュニケーション能力も含まれるのだが、学問や知性を大学の中で単独で磨いていく



専修大学120年記念館 アトリウム

会にも広く理解していただき、それぞれの立場で「社会知性」を積極的に開発すれば、新たな市民社会が必ず到来するはずと考えています」

## 「全入時代」は、 むしろウェルカム

各学部ともに、この『社会知性』の開発に向けて教学内容の革新を進めているほか、広い意味での人生設計を1年次から指導するキャリアデザインセンターなども新設されており、これらについては順次紹介していく予定だが、専修大学で最も知られていないのは人間的な絆の強さだと思われる。

日高学長を始めとして、情熱にあふれた教員が多く、父母を交えて学生を側面から支える育友会や卒業生が集う校友会など人的ネットワークが圧

のではなく、社会との積極的な関与の中で培っていくことが際立った特長といえるだろう。

## 建学の頃と重なる 変革の時代

「大学の歴史を見ればわかるように、医学や法学は社会的な要求によって誕生したものです。課題は大学の外にあったのです。こうした実学は時に暴走するため、それにブレーキをかけるのが哲学でした。このように学問は社会との相互作用の中で形成されてきたのですから、失われつつある倫理や道徳、それに人生観なども含めて『社会知性』という新たな概念で積極的に再認識するということなのです」

ペーパーテストで評価される狭義の学力だけでなく、豊かな人間性と行動力を伴った本来的な英知を養う人材とですが、その命令に抗することは不可能だったのです。そして戦後になり、命からがら生還してきた学生諸君と一緒にあって、私財を投じて大学を再建したのが、今村力三郎総長です。私たちが大学で安穩と勉強できるのは、こうした無数の悲運な犠牲者が礎になつています。戦災で瓦解に瀕した大学を再建できたのも、彼らの無念な想いが心の中にあつたに違いありません。

そう考えれば、誰でも望めば大学で学べる時代がいかに素晴しいかがわかるはず。だからこそ、大学の4年間を無駄に過ごさせてはいけません。そう考えることもまた、専修大学における『社会知性』のひとつなのです」



学長  
法学博士  
日高義博

1948年1月生まれ。専修大学法学部卒業後、明治学院大学大学院法学研究科博士課程単位取得。1975年に専修大学法学部講師。77年に助教授、84年に教授。01年から法学部長。04年に学長就任。